

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年 6月23日現在

機関番号：14302

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2010～2012

課題番号：22530737

研究課題名（和文）

臨床心理面接における対話齟齬の理解：音声とうなずきの観点から

研究課題名（英文）

Understanding of the discrepancy in communication in the clinical psychology interview:
From the viewpoint of sound and nod

研究代表者

花田 里欧子 (HANADA RYOKO)

京都教育大学・教育学部・准教授

研究者番号：10418585

研究成果の概要（和文）：

臨床心理面接では、セラピスト(Th)の介入の意図がまったく伝わらず、クライアント(CI)は介入があったことさえ気づかないことや、意図は伝わっても受け入れられなかったり抵抗されたりすることがある。このような Th の介入意図と CI の受け止めとのあいだで生じる認識のズレ（以下「齟齬」）はいかに生じ、解消するのか？本研究は「聴く」という観点から音声とうなずきに関する定量的な観測データをもとに解明した。具体的には、(1)Th と CI が齟齬を経験しながらも、お互いの発話をどのようにうまく聴き合いながら、対話を達成しているのかを明らかにした。(2)Th と CI が経験するこの齟齬を解消するために、Th が効果的に運用し得る知識（たとえば、声の出し方やあいづちの打ち方）を提供した。

研究成果の概要（英文）：

In the clinical psychology interview, the therapist's intention of the intervention does not come at all, and the client may not notice even that there was intervention. Even if the intention comes, it is not accepted and may be resisted. How does the gap (following "discrepancy") between the therapist's intention of the intervention and the perception of the client occur and dissolve? We elucidated it by quantitative data of sound and nod from the point of the view of "listening". Specifically, (1)we clarified how a therapist and a client experiencing discrepancy achieve communication by listening each other's utterance well. (2)we offered effective knowledge (e.g., how to intonate and how to nod) for a therapist and a client to dissolve discrepancy.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,200,000円	360,000円	1,560,000円
2011年度	1,000,000円	300,000円	1,300,000円
2012年度	700,000円	210,000円	910,000円
年度			
年度			
総計	2,900,000円	870,000円	3,770,000円

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・臨床心理学

(1) 臨床心理学 (2) 聴覚・音声学 (3) 認知科学 (4) 情報学

(5) 傾聴 (6) 対話齟齬 (7) 音声とうなずき (8) 短期療法／家族療法／ブリーフセラピー

1. 研究開始当初の背景

心理臨床の専門行為にたずさわるセラピストは、専門家としての知識や技能の向上と維持を常にはからなければならない。そのためには、指導者によるスーパーヴィジョンに加え、学習者同士でも専門性を高めていけるような相互的な学習（以下「相互学習」）が必要であるが、その重要性は、セラピストの需要の急増にともない、近年ますます高まってきた（藤原，2005；三澤，久保，石井，& 花田，2005；花田，2008a；花田，2008b）。

筆者らは、セラピストの相互学習を推進、活性化させるモデルを設計し、その効果を確認してきた（花田，2008a；花田，2008b）。提案モデルは、面接という対話の実践と研究の往還の中で、学習者が実用できる知識を見出し、共有するというものである（図1）。これまでの分析から、セラピストとクライアントのあいだに様々なレベルでの齟齬が生起することが明らかとなりつつある（井上，古山，& 花田，2008；井上，花田，古山，& 池田，2009）。齟齬とは、たとえば、セラピストはクライアントを勇気づけたつもりでも（介入意図）、クライアントはそう受け止めていないといった、すれ違いをさす。筆者らは、この齟齬が面接のなかで解消されることと、面接が成功することが相関している可能性を、発話と身振りの量的分析（井上，花田，& 古山，2008a；井上，花田，& 古山，2008b；井上，花田，& 古山，2009a；井上，花田，& 古山，2009b；東山，伝，花田，井上，& 古山，2009）と質的分析（Hanada, Furuyama, & Inoue, 2007；古山，2010）から示唆してきた。

その一方で、セラピストとクライアントのあいだの齟齬が臨床心理面接のなかでどのように生起し、解消するのかについては、未だよく分かっていない。これまで、こうしたセラピスト-クライアント間の齟齬について、その原因を、セラピストの態度や習熟（丹治，橋本，安藤，東，& 小川，2008）、クライアントの能力や病態水準（Mazza, Risio, Tozzini, Roncone, & Casacchia, 2003）などの個人的な要因に帰属する研究例は存在する。しかし、現在まで国内外を見渡しても、齟齬を個人間の現象と捉え、セラピストとクライアントの対話においてどのように生起し、解消されるのかについて、特に「お互いの話をどのように聴き、聴かれているのか」という相互作用過程を、聴覚・音声学的な観点から、明らかにする研究は例を見ない。

以上を踏まえ、臨床心理面接における対話で、セラピストやクライアントが「どのように話し（発話）、振舞って（身振り）いるのか」という筆者らがこれまでもっていた着眼点に加え、「お互いの発話をどのように聴き、聴かれているのか」ということが、なぜ齟齬が

生起するのかということに深く関わっているのではないかとこの着想に至った。具体的には、お互いの発話をうまく聴いたり、聴かれたりできていないことによるのではないかと、これは、発話における文字系列（言語情報）のみならず、話者の感情やかまえなどを伝達する役割を持つ音声の中のパラ言語情報（たとえば、声の高さの変化等の韻律情報）とうなずきの関連性（たとえば、タイミング）に示されるのではないかと、だとすれば、齟齬の解消のための操作可能な要件を明らかにしようと考えた。

2. 研究の目的

本研究は、セラピスト-クライアント間の齟齬の生起とその解消にまつわる機構の解明を、「聴き方／聴かれ方」という聴くことにまつわる相互作用の観点から、臨床心理学、聴覚・音声学、認知科学、情報学の手法を組み合わせて用いることで、お互いの発話をうまく聴いたり、聴かれたりしていくための音声とうなずきの微細な関連性を解きほぐしていくことによりすすめた。具体的には以下のプロセスをたどった。

- (1) 臨床心理面接における対話データの整備：相互学習における学習者の臨床心理面接を収録し、齟齬が解消された事例（以下「解消事例」）と齟齬が解消されなかった事例（以下「不解消事例」）に関わる対話データ（言語的・非言語的情報を含む映像音声資料）を整備した。
- (2) 対話データのマルチモーダルな分析による知識発見：臨床心理学内外の分析手法により、解消事例と不解消事例を比較し、各事例の対話データの特徴量を探索し、知識化した。
- (3) 学習者への知識の還元と効果の検証：2.で得られた知識を学習者に還元し、その効果を検証した。この1、2、3...のプロセスを反復するなかで、学習者に有用な知識を継続的に提供した。

3. 研究の方法

本課題の方法は、以下の3つの手続きから成った（図1）。

- (1) 臨床心理面接における対話データの整備：

対話データは、花田が所属研究機関で主催している【相互学習会】で整備した。これは、指導者不在の下、学習者が面接技術の向上を目的に、自学自習形式で臨床心理面接の実践や研究をすすめる場である。学習者は、面接を実施し、その場面を対話データとして収録し、その発話内容を書き起こしたトランスクリプトを参照しながら対話データを視聴し振り返ることで、実践への示唆を得、次回の

【相互学習会】に臨んでいる。ここでは、模倣的にクライアントとセラピストを設定するロールプレイではなく、学習者の中から、実際に自ら抱えている問題を訴えるクライアントとそれに対応するセラピストが面接を行うことになっている。クライアントの実際の問題が扱われるために、セラピストの面接の成功と失敗が区別される。また、学習者は、守秘義務を徹底して遵守した。

一方、【相互学習会】だけでは、対話データを分析する技術に限界があり、音声とうなずきの専門的な検討を十分行いきれないため、学習者の面接技術の向上のための知識獲得に不足が生じてしまう。そこで、研究代表者及び分担者による【対話研究会】を設けている。これは、学習者の知識獲得の支援を目的に、【相互学習会】で収録された対話データのマルチモーダルな分析から発見した知識を学習者に還元し、効果の検証をすすめる場である。なお、【対話研究会】は、【相互学習会】の学習者の総意の下で行われており、守秘義務を徹底して遵守した。

本課題は、【相互学習会】と【対話研究会】の相互補完的な往還による、学習者の相互学習を支援する研究教育体制により遂行した。

(2) 対話データのマルチモーダルな分析による知識発見：

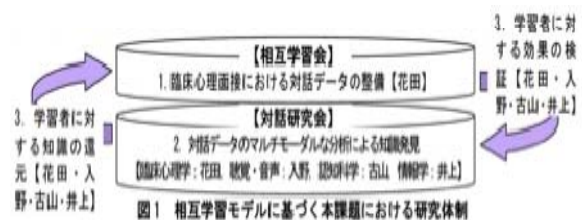
① 対話データの選定:1.で整備した対話データについて、セラピスト・クライアント間の齟齬の生起とその解消の有無を、作業補助者となる臨床心理士2名が独立に判定し、一致率が高く示されたもののみを2)の分析の対象として選定した。

② 対話データの分析:【対話研究会】において、セラピストとクライアントの発話や身振り(認知科学;古山)と聴き方/聴かれ方(聴覚・音声学;入野)の特徴量を、面接への影響や成否(臨床心理学;花田)の点から解釈し、知識化した(情報学;井上)。具体的には各研究者の対話分析の手法を以下のように適用した。入野が自ら開発した加速度センサによる音声・頭部運動同時計測手法により得られたデータを、音声信号処理技術(Irino, Patterson, & Kawahara, 2006; Unoki, Irino, Glansberg, Brian, & Patterson, 2006; Takeshima, Tsuzaki, & Irino, 2007; Banno, Hata, Morise, Takahashi, Irino, & Kawahara, 2007; Nakatani, Amano, Irino, Ishisaki, & Kondo, 2008; 森, 高橋, 河原, 入野, 2009)と聴覚/音声データを分析対象(Smith, Patterson, Turner, Kawahara, & Irino, 2005; Irino & Patterson, 2006; 森, 高橋, 河原, & 入野, 2007; 森, 入野, & 河原, 2007; Tsuzaki, Takeshima, & Irino, 2009)により解析

し、セラピストとクライアントの音声とうなずきについて定量化した。古山がそれら要素の位相関係や関係性の変化を対話環境の動的変化を捉える(構成的)手法により把握した(Hayashi, Furuyama, & Takase, 2005;

Furuyama, Hayashi, & Mishima, 2005; 古山, 2006; Furuyama & Sekine, 2007; 古山, 2008; 古山, 2010)。抽出された特徴量について、花田が齟齬の生起や解消が面接全体の進行に与える影響や成否の点から解釈した(花田, 2005; 高橋 & 花田, 2005; Hanada, 2006, Hanada, Furuyama, & Inoue, 2007; 花田, 2008a; 花田, 2008b; 花田, 2010)。以上を受けて、井上が分析・統合的(帰納的)手法により(井上, 花田, & 古山, 2008a; 井上, 花田, & 古山, 2008b; 井上, 花田, & 古山, 2009a; 井上, 花田, & 古山, 2009b; 東山, 伝, 花田, 井上, & 古山, 2009)、知識の定量的特性及び信頼性を確認した。

③ 学習者への知識の還元と効果の検証：2.から得られた知識を【相互学習会】に還元したときに、学習者の面接技術にどのような変化が生じるかについて、花田が心理臨床家教育の観点から、その効果を半構造化面接、評価シート等から検証した。加えて、その差分が対話のどのような特徴量によって反映されるかについて、2.で示した入野、古山、井上の方法で評価した。以上を【相互学習会】に戻し、1、2、3...のプロセスを反復するなかで、学習者に有用な知識の精練をすすめた。



4. 研究成果 研究の主な成果

本研究の主な成果と対応する5. 主な発表論文等について、以下にまとめる。

(1) 通常の傾聴訓練のように、セラピストが意識し得る、表層的で聴き手一方向の「聴く態度」のみに焦点化するのではなく、入野の音声信号処理技術により聴覚/音声データを分析対象とした。その結果、対話齟齬をめぐって、セラピストやクライアントが当人自身では意識し難い、内面的で聴き手一話し手双方向の「どのように聴き、聴かれているのか」を解明して、臨床心理面接がどのような

音声知覚に基づいて行われているのかについて気づきを得た。そして、効果的な「聴き方／聴かれ方」と状況に応じた対応のための面接技術の向上をはかった。特に、セラピストやクライアントのどちらかの音声やうなずきといった実験観察者による分節化を通した独立要素として分析するのではなく、先述の入野の手法と古山の相互作用の複合的な組織構造の想定[Munhall, 2004]により、臨床心理面接における対話のマルチモーダル性に基づく豊かな理解を得た。その結果、お互いの発話を聴いたり、聴かれたりする際に行われている複雑な音声とうなずきの相互作用過程を可視化できた。そして、臨床心理面接のエビデンスの確立をすすめた。

- ：雑誌論文①、学会発表⑥⑧⑫⑭⑱⑲⑳
- (2) 臨床心理面接の対話を研究者のみで検討するのではなく、相互学習の学習者と対話研究の複数領域の研究者の両者が協働して知識発見をすすめることで、実際に臨床心理面接にたずさわる者がまさに必要とする、対話の多面的で専門的な知識を共有した。
：学会発表④⑬⑰
- (3) 臨床心理面接以外の教育や医療、福祉等の各種実践の場において、サービスの受け手からのクレームを、サービスの提供者が単に聞き流すのではなく、お互いの間で生じている齟齬を解消しながら聴いていくことはいかに可能かについて論じた。
：雑誌論文②③、学会発表①②⑤⑦⑨⑩⑪⑮⑯
- (4) 本研究が依拠する短期療法／家族療法／ブリーフセラピーの基礎研究の展開に関して、テーマを設定し、シンポジウムやワークショップにおいて公開した。
：雑誌論文④⑤⑥、学会発表③
- (5) 以上の実施のために、頷き(頭部運動)を計測する加速度センサ系と音声・画像収録系を構築した。Arduino マイコンで制御するMEMS加速度センサを用いて、口元マイクと組み合わせた小型軽量で目立たないヘッドセットを開発した。さらにビデオデータも含めた様々なデータ間の同期を取るために、百分の一秒表示の時計と時刻データを音で出力するソフトウェアも開発した。スタジオのような固定的で大掛かりなセットではなく、様々な収録場所に容易に持ち運べる上、今回の目的に十分な精度を確保できるようになった。

得られた成果の国内外における位置付けとインパクト

本研究により、臨床心理対話等における「上手く聴き／聴いてもらうための聞き手-話し手の口振りと身振り」に関する実証的知見を得ることができた。具体的には、セラピスト-クライアント間の齟齬の生起には、お互いの発話をうまく聴いたり、聴かれたりできていないということが関わっていた。ここには、対話上、「聴き方／聴かれ方」を支えている、ささやかで気付かれにくい、重要な機能を持つ、音声中のパラ言語情報とうなずきの特徴的な関連性が、齟齬の生起や解消を規定する重要な一因になる。そのため、顕在化しにくいこれらの無意識的な諸行動を意識化し、適切に運用できるかが、齟齬の解消、ひいては面接の成否に影響する。

以上、得られた成果は、従来の臨床教育において強調されてきた傾聴について、「きちんと聴くとはどういうことか」ということの解明に具体的に寄与するものと位置付けられる。また、心理臨床場面のみならず、「聴く」ことの重要性が様々な場面で指摘される現代において、本研究はよりよい対話構築の実際的なありようにインパクトを与える。

今後の展望

本研究では、「上手く聴き／聴いてもらうための聞き手-話し手の口振りと身振り」に関する実証的な検討で、臨床心理対話について実践をつんできた。

一方で、これまで透析医療と臨床心理面接に携わってきた筆者らは、透析患者-家族間の悪循環の生起とその解消には互いの話をきちんと聴き／聴いてもらっているか否かが大きく影響すると予想している。しかし未実証なので、透析患者-家族間の対話事例を対象に、悪循環と「聴くこと」の様相の相関を解明して知見を獲得し、良い対話の場の設計とその効果を問いたいと考えている。

透析患者は生活に様々な制約を負う。たとえば、患者は医学的見地から制限された食事を毎日過不足なく摂る必要がある。患者を支える家族はそれをサポートしようとし、患者思いの人ほど厳格に食事管理をしようとする。ところが、そこに齟齬と悪循環が生じる。患者は重要性を認識しながらも食事という重要な楽しみを奪われるように感じ、家族に反抗的な態度をとったり自己管理の意識が希薄になったりする。すると、家族はいつそう管理を徹底しようとし、患者はさらに拘束感を強めお互いの対話がとげとげしくなることも起こってくる。このようなすれ違いのあるパターン化したストレスフルな対話の悪循環の生起メカニズムの解明と解消法について、筆者らのいままでの研究成果が活用できると考えている。具体的には、透析患者と家族は日々の煩瑣な制約のなかで、互いの発話をどのように聴き／聴かれながら対話

しているのかを明らかにしたい。そして、透析患者と家族が悪循環から脱するために効果的に運用し得る知識（たとえば、言葉がけや返事の仕方）の提供を目指す。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 6 件）

- ① Inoue, M., Ogihara, M., Hanada, R., & Furuyama, N. (2012). Gestural cue analysis in automated semantic miscommunication annotation. *Multimedia Tools and Applications*, 61(1), 7–20. (査読有)
- ② 一宮貴子, 阪田万佐代, 丸山今日子, 岸谷里美, 清田敦彦, & 花田里欧子. (2012). 腎移植予定の極端な食思不振を訴える透析患者への心理的援助. *大阪透析研究会会誌*, 30(1), 39–42. (査読有)
- ③ 花田里欧子. (2012). 何でもものを欲しがって困ります：おねだりの理解と対応（特集 小学一年生・二年生のこころと世界）－（こころと体のトラブル教育相談）. *児童心理*, 66(6), 113–117. (査読有)
- ④ 花田里欧子. (2012). 特集：東日本大震災・震災支援一企画にあたって. In *日本ブリーフセラピー協会編 (Ed.), Interactional Mind V (2012) (Vol. 5, pp. 7–8)*. 北樹出版. (査読有)
- ⑤ 岩本脩平, & 花田里欧子. (2011). 教育臨床について考える：ブリーフセラピーの 50 年－これまでとこれから－. In *日本ブリーフセラピー協会編 (Ed.), Interactional Mind IV (2011) (Vol. 4)*. 北樹出版. (査読有)
- ⑥ 伊東優, & 花田里欧子. (2010). 教育臨床について考える：ケータイ・ネット時代のブリーフセラピー. In *日本ブリーフセラピー協会編 (Ed.), Interactional Mind III (2010) (Vol. 3)*. 北樹出版. (査読有)

〔学会発表〕（計 20 件）

- ① 清田敦彦, 横山美紀, 岸谷里美, & 花田里欧子. (2013). 腎不全患者とその支援者が支え合えるポジティブな対話環境の設計について. 第 58 回日本透析医学会学術総会・総会特別号, 2013 年 6 月 22 日 (Vol. P-2-338, p. 861). マリンメッセ福岡、福岡.
- ② 清田敦彦, 横山美紀, 岸谷里美, & 花田里欧子. (2013). 透析患者と支援者が支え合えるポジティブな対話環境の設計について. 第 80 回大阪透析研究会, 2013 年 3 月 17 日 (Vol. E-27, p. 58). 大阪国際会議場、大阪.
- ③ 花田里欧子. (2012). 東アジアの家族を比

- 較する(ワークショップ C). 日本ブリーフセラピー協会第 4 回学術会議, 2012 年 11 月 11 日 (p. 25). ウィリング横浜、神奈川.
- ④ 花田里欧子. (2012). 家族療法的トレーニング～家族療法のトレーニング、家族療法を応用した心理臨床のトレーニング～（自主シンポジウム 81）. 日本心理臨床学会第 31 回秋季大会論文集, 2012 年 9 月 14 日 (p. 740). 愛知学院大学、愛知.
 - ⑤ 清田敦彦, 横山美紀, 阪田万佐代, 丸山今日子, 堀江由美子, 井漕直美, 石田幸広, 岸谷里美, & 花田里欧子. (2012). 透析現場での心理的支援の臨床効果と限界について－一種の愁訴を示す末期腎不全症例を通しての考察－. 第 79 回大阪透析研究会, 2012 年 9 月 9 日 (Vol. D-17, p. 58). 大阪国際会議場、大阪.
 - ⑥ 末崎裕康, 古山宣洋, 花田里欧子, 井上雅史, 有久亘, & 入野俊夫. (2012). 心理カウンセリング来談者の問題表現時の視点構造とマイクロスリップ－問題の所在が遷移した事例に関する質的検討－. 日本生態心理学会第 4 回大会発表論文集, 2012 年 7 月 7 日 (pp. 8–13). 公立はこだて未来大学、北海道.
 - ⑦ 清田敦彦, 一宮貴子, 阪田万佐代, 丸山今日子, 堀江由美子, 井漕直美, 石田幸広, 岸谷里美, & 花田里欧子. (2012). 精神的健康を損ない易い腎不全患者の QOL 向上のための心理的支援. 第 57 回日本透析医学会学術総会, 2012 年 6 月 22 日 (Vol. P-1-4, p. 751). 京王プラザホテル札幌、北海道.
 - ⑧ Inoue, M., Hanada, R., Furuyama, N., Irino, T., Ichinomiya, T., & Massaki, H. (2012). Multimodal corpus for psychotherapeutic situation. Workshop on Multimodal corpora: How Should Multimodal corpora Deal with the Situation?, (Pre-conference workshop of LREC 2012), May 22, 2012 (pp. 18–21). Istanbul, Turkey.
 - ⑨ 清田敦彦, 一宮貴子, 阪田万佐代, 丸山今日子, 堀江由美子, 井漕直美, 石田幸広, 岸谷里美, & 花田里欧子. (2012). 精神的健康を保ちにくい腎不全患者の QOL 向上のための心理的支援. 第 78 回大阪透析研究会, 2012 年 3 月 11 日 (Vol. A-12, p. 43). 大阪国際会議場、大阪.
 - ⑩ 清田敦彦, 一宮貴子, & 花田里欧子. (2011). 腎移植を間近に控えた、極端な食思不振を訴える透析患者への心理的援助－「短期／家族療法」の臨床効果、第 1 報－. 第 35 回大阪府医師会医学会総会, 2011 年 11 月 6 日 (Vol. C-5, p. 51). 大阪府医師会館、大阪.
 - ⑪ 一宮貴子, 阪田万佐代, 丸山今日子, 吉井

- 浩, 岸谷里美, 清田敦彦, & 花田里欧子. (2011). 腎移植予定の極端な食思不振を訴える透析患者への心理的援助—「短期／家族療法」の臨床効果、第 2 報一. 第 77 回大阪透析研究会, 2011 年 9 月 11 日 (Vol. D-1, p. 26). 大阪国際会議場、大阪.
- ⑫ 末崎裕康, 古山宣洋, 花田里欧子, & 井上雅史. (2011). クライアントの主訴の遷移とその前後の身振り配置の変化. 日本心理臨床学会第 30 回秋季大会論文集, 2011 年 9 月 4 日 (p. 327). 福岡国際会議場、福岡.
- ⑬ 花田里欧子. (2011). 家族療法の効果研究—システムとナラティブ—: 変数としての相互作用パターン(自主シンポジウム 2). 第 28 回日本家族心理学会大会プログラム・発表論文集, 2011 年 8 月 26 日 (pp. 33–34). 鹿児島女子短期大学、鹿児島.
- ⑭ Inoue, M., Irino, T., Furuyama, N., Hanada, R., Ichinomiya, T., & Massaki, H. (2011). Manual and Accelerometer Analysis of Head Nodding Patterns in Goal-oriented Dialogues. *Human-Computer Interaction, Part II, HCI 2011*, July 12, 2011 (Vol. LNCS 6762, pp. LNCS 6762, 259–267). Orlando, FL: Springer.
- ⑮ 清田敦彦, 丸山今日子, 山本理美, 吉井浩, 岸谷里美, 牧久美子, & 花田里欧子. (2011). 原因不明の痛みを訴える透析患者に施行した家族療法に基づく心理カウンセリングの臨床効果. 第 56 回日本透析医学会学術総会, 2011 年 6 月 19 日 (Vol. P-4-1, p. 753). パシフィコ横浜、神奈川.
- ⑯ 花田里欧子. (2011). リフレクティング・プロセス再考: 臨床心理士養成指定大学院授業における応用(自主シンポジウム C-06). 第 28 回日本家族研究・家族療法学会抄録集, 2011 年 6 月 4 日 (Vol. 28, p. 56). 静岡県コンベンションアーツセンター(グランシップ)、静岡.
- ⑰ 清田敦彦, 丸山今日子, 山本理美, 吉井浩, 岸谷里美, 牧久美子, & 花田里欧子. (2011). 特定の身体症状を訴える易怒性の強い透析患者に対して行った家族療法による心理カウンセリングの有用性について—第 1 報一. 第 76 回大阪透析研究会, 2011 年 3 月 13 日 (Vol. D-18, p. 52). 大阪国際会議場、大阪.
- ⑱ 井上雅史, 入野俊夫, 古山宣洋, 花田里欧子, 一宮貴子, & 末崎裕康. (2010). 対話の流れと頷きパターン変化. HAI シンポジウム 2010, 2010 年 12 月 12 日 (p. 1A–3). 慶應義塾大学日吉キャンパス、神奈川.
- ⑲ Inoue, M., Furuyama, N., Hanada, R., Irino, T., Massaki, H., & Ichinomiya, T. (2010). Successful head-nodding movements in psychotherapeutic process - when and how. 4th Conference of the International Society for Gesture Studies (ISGS), July 29, 2010 (p. 193). Frankfurt/Oder, Germany.
- ⑳ Inoue, M., Ogihara, M., Hanada, R., & Furuyama, N. (2010). Utility of Gestural Cues in Indexing Semantic Miscommunication. The 2010 International Workshop on Multimedia and Semantic Technologies (MUST 2010), May 21-23, 2010 (pp. 1–6). Busan, Korea: Future Information Technology (FutureTech), 2010 5th International Conference on.

〔図書〕(計 5 件)

- ① 花田里欧子. (2012). 学校への過度な要求—学校と保護者のよりよい関係構築のために. In 本間友巳 (Ed.), 学校臨床—子ども・学校をめぐる教育課題への理解と対応— (pp. 140–153). 金子書房.
- ② 花田里欧子. (2010). 介護者が疲れてしまわないために: 介護に携わる家族への援助. In 長谷川啓三 (Ed.), 解決志向介護コミュニケーション—短期療法で家族を変える— (pp. 118–130). 誠信書房.
- ③ 花田里欧子. (2010). 解決志向介護に関する理論. In 長谷川啓三 (Ed.), 解決志向介護コミュニケーション—短期療法で家族を変える— (pp. 201–209). 誠信書房.
- ④ 花田里欧子. (2010). 言葉に頼らない介護—老犬の介護から学ぶもの—. In 長谷川啓三 (Ed.), 解決志向介護コミュニケーション—短期療法で家族を変える— (pp. 149–151). 誠信書房.
- ⑤ 花田里欧子. (2010). 解決志向介護ってなに?. In 長谷川啓三 (Ed.), 解決志向介護コミュニケーション—短期療法で家族を変える— (pp. 1–10). 誠信書房.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

花田 里欧子(HANADA RYOKO)
京都教育大学・教育学部・准教授
研究者番号: 10418585

(2) 研究分担者

入野 俊夫(IRINO TOSHIO)
和歌山大学・システム工学部・教授
研究者番号: 20346331
古山 宣洋(FURUYAMA NOBUHIRO)
国立情報学研究所・准教授
研究者番号: 20333544
井上 雅史(INOUE MASASHI)
山形大学・大学院理工学研究科・助教
研究者番号: 50390597